

Title	角田文衛：『中務典侍』
Author	塚原, 鉄雄
Citation	人文研究. 16 卷 3 号, p.298-301.
Issue Date	1965
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

し、著者は、文学史の立場に立脚する。作品は、島津博士の出発点であったが、著者には到達点である。

無論、出発点と呼び、到達点と称するのは、方法論的な説明である。研究作業が、作品から出発するのは、当然であろう。ただ、ここに、興味のある一事は、岩波文庫の校訂において、島津博士の作業が、読解に便宜な本文を提供するという姿勢が濃厚なのに対比して、著者の作業は、原典に忠実な本文を再現するという態度が顕著なことである。文学批評の分野においても、両者の相違を示唆する事実と云ってよい。そこには、研究史的な時代の差異が、反映していることは、否定しえないけれども、また、両者の立場の相違が、その根柢をなしているかと推定すべきであろう。

さて、著者の方法を、さらに敷衍すると、基本的に、歴史社会的な観点に立脚して、作者の内部世界を、客観的に捕捉し、それとの連関から、作品の世界を理解する。そして、本文批判の成果と本文解釈の方法とが、厳正かつ適切に活用されるのである。

こういった観察に、誤解がないとすれば、著者は、王朝文学において、学問としての文学批評を、歴史的現実に即応して、客観的に成立させ、実践的に実現したといえよう。藤岡博士から島津博士に発展した文学批評は、著者の出現において、文学創造という営為に、科学的な理解を結実させた。

ここで、科学的というものは、少なくとも、二個の条件を充足することにおいて、そうなのである。著者の認識と理解とが、科学的方法によって獲得されていることを、その第一とする。そして、その第二は、その認識と理解とが、歴史社会的条件において定着されて

いることである。この両者は、兼備していなければならないはずであるけれども、現実には、困難であり、稀少である。多数の研究が、その片方に欠如して、しかも、そのことに盲目であるのが、忌憚のないところ、事実なのではあるまいか。

個々の論文については、言及しないでおく。直接に読すべき性質のものだからである。国文学の研究が、学問的ということ、文学以前の基礎研究に力点が集中したり、科学的ということ、社会科学の流用に置換されたり、あるいはまた、文学性ということ、文学評論を跋扈させたり、——そのいずれもが、意味はあるにしても、文学不在の国文学という現象を現出した。それに関連する批判や反省は、内外に存在するし、また、そうした批判や反省に立脚する研究業績も、皆無なものではない。しかし、大勢は、旧態を維持している。この現状にあって、本書の占有する意味は、極力、強調しても過大となるまい。

附篇に、書評五篇がある。著者の興味と方法と思考とを理解するうえで、参考になるはずである。(A5版四三四ページ。昭和三九年一二月二五日刊。一五〇〇円。東京大学出版会)

塚原鉄雄

紹介 角田文衛 『中務典侍』

中務典侍は、藤原正雅の娘、藤原惟風の妻、中務乳母とも呼称された藤原高子(九七三?—一九三二?)である。藤原道長の次女で、三条天皇の中宮となった、枇杷皇太后妍子の乳母であった。

著者の問題意識は、「撰閣政治を特色としてゐた藤原時代において、皇后や中宮の乳母たちは、どのやうな地位を占め、かつどれほどの政治的影響力をもつてゐたのであらうか」という疑問を起点とする。だが、この問題は、未開拓の分野であり、かつ、断片的な資料しかないために、その解明が困難であつた。そこで、著者は、断片的ではあるけれども、比較的史料に恵まれてゐる中務典侍を対象として、その一生を検討する。

龐大な文献資料を駆使して、王朝女性の生活記録を、現実に復原する著者の力柄は、一般に熟知するところである。藤原元子を対象とした『承香殿の女御』（中央公論社）が、学生たちにも愛読されたのは、最近のことである。一般読者を予想する旧著と、學術論文として刊行された新刊と、執筆の態度に、若干の異同が窺知されるのは当然であらう。しかし、著者の構想と文章とは、読者を魅了して、旧著の感動を倍加させるに相違ない。専門の圏外にある無責任な立場から、放言を容赦してもらえらば、率直な感動を記録しておこう。断片的な資料を、批判し位置づけ、現実を再現する著者の方法に、ぼくは、シャーロック・ホームズを想起した。そして、その感動を記録するのに、ワトソンの文才がないことを遺憾とする。

さて、本書は、十章と附録とから構成される。それぞれの内容について、簡単に紹介しておこう。

第一は、「高子の生涯」である。ここでは、中務典侍藤原高子の一生が、概括的に記述される。その家系、教養、結婚、出仕、生活繁累、晩年に亘って、伝記の輪廓が、要領よく整理されている。

ここは、研究の結果に基礎づけられた記述であつて、その理由づけが、次章から展開する。そのためか、叙述に、文学的な主観の介入することがある。「それにしても側隠に堪へないのは」といった、感情的な規定や、「灑子にとって痛歎に堪へなかつたのは」といった、感情移入が散見する。叙述と抒情とが交織する文章は、旧著の読者を堪能させるに相違あるまい。それが、魅力を構成することとは否定できない。けれども、それらが、主観的な表現であることは、やはり、事実であらう。

しかし、このことから、その煩瑣なまでの考究が、主観的もしくは観念的な混入を、容認していると誤解してはならない。著者の態度は、厳正な実証に徹底して、極度に細心かつ緻密である。開巻の主観的な表現は、導入としての効果を計算したものといえようか。第二は、「高子の問題」と標題がある。ここでは、藤原高子が、乳母中務であり、かつ、中務典侍であつて、尊卑分脈の藤原僮子典侍、左経記の典侍藤原灑子と同一人物であることが、明確に判定される。そして、藤原惟風の妻、惟経の母であつたことも、確証される。

なお、同時代の同名異人にも、詳しい説明がある。源為理の娘で、齋院選子内親王に奉仕した中務典侍、中宮彰子に奉仕した中務乳母源隆子、藤原近信の娘であつた典侍藤原高子などは、全く別人であつた。

第三は、「高子の出生」が吟味される。ここでは、尊卑分脈の錯誤、勅撰作者部類の誤謬を訂正し、正雅の娘であることが、十分な説得力を具有して証明される。更に、生年について、天延元年（九七三）説を提唱する。

第四は、「高子の結婚」である。正暦年間に、惟風と結婚し、正暦四年（九九三）頃に惟頼を産した。その家系が、摂関家の周辺にあったことを指摘してある。

第五は、「高子の栄進」についての論述である。妍子の乳母として選定されたことは、惟風の栄進にも、影響するところが多大であった。そして、妍子の、尚侍、東宮妃、中宮と、その地歩を確実に昇進させるにつれて、惟風とその子孫とは、その宮司を運営する中心的な組織を構成する。その栄達は、道長でさえが奇怪視するほどの、破格なものがあつたという。

第六は、「高子の非運」である。公人としては、従四位下の典侍であり、妍子の信愛のもとに、その生理的な世話にまで、関与する、側近の第一人者であつたが、私人としては、多事であつた。惟風の卒去、惟貞（惟風の弟）との和姦、惟兼（惟風の子）の刑事事件などがある。

惟兼の事件とその結末とは、刑事的処理に、皇太后の乳母が、影響力を具有することを証明する。そして、惟貞との事件は、個人的な醜聞が、天下に暴露されても、妍子と高子との結合に、動揺や亀裂を生起することがなかった。乳母の地位というものを、確認させる事件であつた。

ここで、著者は、小右記目録（東山御文庫）の誤謬を修正し、御堂関白記に記録された呪咀事件を解釈している。

第七の、「高子の再婚」は、惟貞との結婚である。瀧子と改名したのも、その時分だという。三条法皇の崩後、尾張守惟貞の任地に下向するが、道長の娘尊子の著裳に、理髪を担当したことも、その

地位を察知させられる。

第八は、「高子の復帰」で、離京半歳の後、帰京した高子の動静を記録する。ここでは、栄華物語の錯誤が訂正される。高子の夫が、春宮亮藤原登任であり、高子の娘五の宮の内侍が、登任を父とするはずは、明白にありえないと論証する。

第九、「高子の栄耀」は、妍子の所生で、後朱雀天皇の皇后となった、禎子内親王の成長から入内まで、華美な活気の充溢する枇杷殿の生活や儀式に圍繞された栄光を描出する。

ここで、興味ある事実は、妍子の大響が華美であつたために、道長が立腹し、これを黙視したことで、頼通をも問責した。ところが皇太后大夫源道方や中務典侍には、そのことがなかったという。

さきに、高子が、惟貞と和姦したとき、誘拐と誤伝された。そのとき、左大臣道長は、深夜であつたけれども、検非違使の役人のほか、自分の隨身たちをも派遣して、高子の行方を搜索させている。そして、両人が発見されると、過酷な待遇で、惟貞の名譽を破壊したのである。

彼此、対照して勘案すると、中務乳母に対処する道長の姿勢というものが、漠然と推察しうるようである。もっとも、著者の興味は、事実を再現することに、焦点が集注される傾向がある。事実を解釈することには、紙幅を割譲するところが僅少である。しかし、それだけに、思索の豊富な可能性を醸成して、興趣が枯渇しない。

第十、「高子の悲歎」は、妍子の病臥から臨終、さらに中陰の法会まで、側近に奉仕して、疲労困憊、哀痛慟哭する高子が、髣髴と再現される。

王朝貴族の乳母たちが、その奉仕する女性の生活や人生に、影響することが甚大であったことは、文学作品からも、容易に推察しうるところである。だが、彼女たちが、その女性の配遇となった男性の、官僚としての生活や行動に、どのように関与しえたかということになると、明瞭でないといってよい。まして、政治ということになれば、文学作品からの収穫は、絶望としなければなるまい。

摂関政治が、後宮政策に密接して成立し維持されたことは、常識であろう。その場合、後宮の中核となる女性の乳母が、直接または間接に、その女性に影響するところは、容易に想像しうるところである。そして、それが、摂関政治に反映することも、自然に想像しうる。けれども、その実情は、解明されていない。

資料の関係で、全面的に、それを解明することは、不可能であろう。けれども、この問題を回避することは、摂関政治を理解するに重要な鍵の一つを、遺忘することとなる。現象を捕捉することは出来ても、現象を説明するのに、十分でなくなるはずである。

問題を、文学に限定しても、この問題は、極わめて重要である。紫式部の奉仕した彰子の後宮、清少納言の奉仕した定子の後宮などに比較すれば、定子の後宮は、文学的に貧弱である。そして、それは、乳母藤原高子の文学的な才能と関心とが稀薄であったことに、密接な関連があるらしい。

いずれも、当代第一の権臣を父親とする女性の後宮である。姘子の後宮に、遜色があったわけではない。むしろ、道長の権威が最盛の時期は、枇杷殿に活気の充溢していた時代でもあった。しかし、そこに、文学的な才媛として、卓越した女性是指摘しがたい。

一般に、後宮を充実する手段として、才媛が徴集されたように説明されている。それは、事実であったろう。しかし、それが、唯一の方法ではなかったし、また、絶対の方法でもなかった。

宮廷貴族あるいは後宮生活において、文学的な才能や業績といったものは、どれだけの意義を具有し、どれだけの価値を賦与されたのであろうか。そういった検討は、文学研究もしくは文学史研究の立場から、殆んどなされていない。けれども、そのような吟味が忽諸にされるとき、その認識は、過大もしくは偏頗を免れまい。

著者は歴史学者であり、本書は歴史研究である。したがって、本格的な批評は、史学の分野でなされるであろう。だが、王朝文学の研究にも、反省と示唆とを、豊富に提供することは、文学の分野から紹介しておかなければなるまい。

なお、附録に、藤原為光の娘たち、五人の女性の生涯を、綿密に解明した論考がある。道長の、摂関政治を運営する人的配置の妙法として、興味ある事実が解明されている。ここでも、御堂関白記の空白を充填し、尊卑分脈の紛糾を訂正するところがある。(A5版本文一一〇ページ、図版五。昭和三九年一月三〇日刊。八〇〇円。財団法人古代学協会)